

10月1日 年間第26主日

民 11:25～29 ヤコ 5:1～6 マコ 9:38～48

1. マコ

v.40 「わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方なのである。」

キリスト教会の中心にあるものが主日のミサであるとすれば、キリスト教会の周辺にあるものが各種の宣教活動や信徒たちによる親睦、養成、奉仕等の活動であると言えるでしょう。それらの一つ一つが“キリスト教会の活動としての正当性”を持っているかどうかということは、なかなか難しいけれども重要な判断であって、私たちはそのようなことに無関心であってはなりません。

イエス・キリスト、キリスト教、教会等の名称を使った数え切れないほど多くの活動が存在していて、私たち一人一人もそのような活動のいくつかに参加したり関係したりしているのが普通だと思います。そのような、自分が関係を持っている活動が、“キリスト教会の活動としての正当性”を持っているだろうかと考えてみる…… ことを、今朝の朗読聖書は私たちに提案しているのではないのでしょうか。

2.

今朝の福音書のテキストから、そのような判断のための基準のようなものが読み取れるように思います。

先ず第一は v.38 の、“わたしたちに従わない……” 人々であっても、イエス・キリストの名によって活動しているのなら、それは正当なものだという判断です。

今朝の旧約聖書のテキストは、この判断に更に深い意味付けを加えます。モーセに召集されて幕屋の周りに集まった70人の長老たちに、神はモーセに授けられている霊の一部を取って分け与えられました。すると彼らは一時的に預言状態になって、モーセ自身の預言者としての活動に共に与かったというのです。ところがイスラエルの長老でありながら幕屋に行かなかった二人の人も、彼らの宿営で同時に預言状態になりました。二人は70人の長老たちと別行動を取ったけれども、彼らを預言状態にしたものが同じ主の霊であった以上、これは正当性をもっているというのがこのテキストの主旨です。

3.

次に、いろいろな活動の一つ一つが“キリスト教会の活動としての正当性”を持っているかを判断する第二の基準を、わたしたちは vv.40-41 から読み取ることが出来ます。「わたしたちに逆らわない者」という基準です。この「わたしたち」とは、この物語りではイエスと弟子たちのことです。しかし主イエスは復活して天に昇り、イエスの弟子である使徒たちの時代も過ぎ去って行くとき、教会はこの「わたしたち」を使徒継承という形で受け継ぐことによって最初の教会との連続性を保つように導かれて来たのでした。

ですから私たちは、すべてのことを教会に受け継がれて来ている使徒継承に「逆らわない」という基準

で判断することを教えられるのです。“それは使徒継承の土台の上に展開されている”という判断が私たちに大切なのだということ、v.41は教えてくれているように思えます。繰り返しますが、このv.41の「あなたがた」もこの物語りではイエスと弟子たちのことであって、一般的なキリスト者への親切を話題にしているわけではありません。使徒継承を大切に考えることは、主イエスを愛し使徒たちの働きを感謝して重んじることなのです。

4.

私たちのカトリック教会とは関係もなく、また私たちの全く知らないような活動団体に対しても、私たちが寛容であるべきことを、今朝の福音書は勧めているのではないのでしょうか。ただそのような寛容さと同時に、私たちは“教会が受け継いで来た使徒継承に「逆らわない」という基準で考える”ということにも、目覚めたいものです。私たちは終末の裁きのときに、審判者である再臨のイエス・キリストから「あなたはわたしたちの味方でした」と言っていただけることを期待して、共に「あわれみの賛歌」を歌っている会衆なのですから。

アーメン、ハレルヤ。

10月8日 年間第27主日

創 2:18～24 ヘブ 2:9～11 マコ 10:2～16

1. マコ

今朝の福音書の日課の主題を、単に離縁という一つの行為だけに限定しないで、もっと男と女との関係全体に広げて考察するのが適切なように思えます。

”キリスト教では離婚は禁止されている”とか、“キリスト者が離婚することは、神の戒めに背くことである”というふうに考えるのが、西欧のキリスト教の伝統であると思います。現代のカトリック教会もその伝統の中にあります。

しかし今朝の朗読聖書は、決してただそのような結論だけを述べているのではないことに、私たちは注目したいと思います。

2.

イエスを試して(陥れようとして/マコ 12:13)質問したファリサイ派の人々は、“離縁”という行為そのものが律法に適合しているかどうかを問題にしました。それに対して主イエスは、「神は人を男と女にお造りになった」という、より根本的な問題に議論を深められました。「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。」「神が結び合わせてくださった……。」

3. 創

創世記2章の物語りで、女は男にとっての「助ける者」として創造されたと述べられています。男が独りであるのは「良くない」……、つまり半端であり、女というパートナーを得て初めて正常になる……、そのようなものとして神は人を「男と女に」創造されたと語っているのです。

夫婦にとって相手がいつも良いパートナーであるとは限らない現実を、私たちは体験的に知っています。しかし人が罪を犯す以前のエデンの園においては、男と女とは「これこそわたしの骨の骨、わたしの肉の肉」であった……、それが神が創造された本来の男と女の姿であった……というのが、創世記2章の物語りが述べていることなのです。

4.

近年、結婚しない男、結婚しない女がたいへん多くなり、また結婚してもやがて離婚することがちっとも珍しくない時代になりました。この問題に関するいろんな人たちのいろんな意見を聞いてみると、面白いことに気付きます。当たり前と言えば当たり前なのですが、人は自分が経験した結婚や男女関係を基準にして判断するもので、自分が出会ったことのないような男女関係や、自分が味わったことのないような種類

の結婚については、ほとんど無理解だということです。

そのような平均的な現代人の多くにとって、マコ 10:6-9 はキリスト教会の一つの掟としては読めても、自分たちの生きている現実とは別世界の、理想の世界の事柄 …… 、非現実的な道德律でしかありません。私たちの生きている“この世”は、罪によって混乱している世の中なのです。

しかし、創世記 2 章の物語りそのものが、元来そのような罪によって混乱している世の中で語られて来たのだということに、注意を喚起したいと思います。神の民イスラエルは、人類がすべてエデンの園から追放された者の子孫であることを知っている民でありました。

5.

イエス・キリストの十字架の死は、実はそのような私たちの現実の罪のための死でありました。主イエス・キリストの受難と死と復活による救いを理解するには、このイエスが私たちに代わって負ってくださった罪の現実に目を開かなければなりません。私たちの結婚、私たちの男女関係が、神の創造の本来の姿からどれほど離れてしまっているか …… という罪の現実に気付くことが、実はイエス・キリストによる罪の赦しと救いの福音を正しく理解する第一歩なのです。

私たちを神の国の民として聖別してくださった父なる神は、その救いのために御子イエスを(贖いのための)死の苦しみを通して栄光と栄誉へと引き上げられたのでした(ヘブ 2:9)。私たちの祭壇のキリストは、そのような救い主なのです。

私たちはこの主イエス・キリストの救いなしには、神の国を見ることの出来ない者であったことを、罪の現実のただ中から、感謝して告白しようではありませんか。

アーメン、ハレルヤ。

10月15日 年間第28主日

知 7:7～11 ヘブ 4:12～13 マコ 10:17～30

1. マコ

v.23 「イエスは弟子たちを見回して言われた。“財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。”」

いったいマルコ福音書はこの物語りで、金持ちであることはキリストの救いから遠いところにいることになると言っているのでしょうか。

この物語りの登場人物である「ある人」は、たくさんの財産を持っていました。そして彼は、それをすべて売り払って貧しい人々に施してしまうことが出来ませんでした。それでイエスの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去ったと述べられています。

しかし私たちは、マルコ福音書がこの物語りで言おうとしていることを正しく聞くためには、安易な思い込みを警戒しなければならないと思います。

清貧を徳とする考え方が古くからあって、この福音書のテキストもその一つの論拠として理解されて来ました。しかしこのテキストは「永遠の命を受け継ぐ」(v.17)「神の国に入る」(v.23)「救われる」(v.26)ことを問題にしているのであって、“徳のある生活”を教えているではありません。“人は貧しければ救われる”ということと言おうとしているのでも、もちろんありません。またこの「ある人」が、もし彼の財産を半分にならなくても減らせば、もう少し救われ易くなったであろうという話でもないのです。

2.

今日我が国は世界的に見てもたいへん豊かになりました。多くの日本人が、金持ち意識を持つようになりました。他国の人々に、特に発展途上国の人々に比べて、自分たちは当然豊かなのだという意識のことで、日本に来て働いているそのような外国人たちにとって、この国で得る数ヶ月分の賃金が彼らの国での一家族の何年分もの生活費に相当するという話を聞いても、だれも不思議がりはしません。彼らの国の人々に比べて日本人が金持ちであるのは自明なことだという意識が、すっかり定着しているからです。

ところが同じ日本人がバブル崩壊以来の景気低迷の中で、自分は経済的に苦しい、自分たちは金持ちではなくて貧乏人であるとも考えているのです。ですから私たちの体験や実感から言うと、ある人が金持ちであるか貧乏であるかは、具体的な財産の量の問題ではなくて、その人の主観的な意識の問題であると言えます。

3.

マルコ福音書が書かれた当時の教会の人々にとって、イエスの言われた 10:19 の掟はだれでもよく知っ

ているものでした。それは十戒の後半の部分からの引用です。ですからこの掟にはその前半の部分があって、それがこの掟の前提となっていることは、当時の人々にとっては自明なことであつたに違いありません。

するとマルコ福音書はこの物語りで、十戒の前半と後半を決して切り離してはならないことを読者に改めて思い起こさせようとしているのだと言うことが出来ます。その十戒の前半とは、要約すれば、唯一の神、唯一の信仰、唯一の救いの宣言です。

「だれが救われるのだろうか」(v.26)、「人間にできることではないが」…… 神が救ってくださる(v.27)というのが、この物語りの言おうとしている本来の意味であり、更にその救いを与えてくださる神への愛と信仰がどんな財産よりもはるかに大切なのだということを、読者に思い起こさせようとしているのです。

4. ヘブ

人は、……それが金銭的、物質的なものであれ、人間関係や知的文化的、精神的、情緒的なものであれ……、自分の持っているいろいろな財産を頼りにして生きているものです。自分は貧乏だと思ふ人も、それは決して自分の頼りにしている財産を半分捨てた(失った)などということではなくて、もっと多くの頼りになる財産を得たいと考えているだけのことです。

v.13 「神のみ前では隠れた被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されているのです。この神に対して、わたしたちは(終末の裁きの日に)自分のことを申し述べねばなりません。」

私たちは今朝、この言葉を“慰め”として聞きたいと思います。

マルコ福音書の「ある人」の姿は、私たち自身の現実の姿の一端でもあります。しかも「人間にできることではないが」…… 私たちを救ってくださる神に信頼して、私たちはこうして主日のミサに集まって来ているのです。そのようなあるがままの私たちの姿のすべてを、神は御覧になってくださっている(さらけ出されている)ということこそが、ミサをささげる私たちへの慰めなのではないでしょうか。イエス・キリストの救いは、そのような慰めの中にある救いなのです !!

アーメン、ハレルヤ。

10月22日 年間第29主日

イザ 53:10～11 ヘブ 4:14～16 マコ 10:35～45

2000年10月22日は、「世界宣教の日」です。教皇ヨハネ・パウロ2世はこの日のメッセージで、「教会の宣教の使命にかかわる自覚を新たにしよう促し、人々への宣教が急を要する務めであることを思い起こさせます」と述べています。

キリスト教会の歴史には、いつも数多くの殉教者がいて、それは現代にも続いています。福音の宣教には、福音の証人たちの殉教がいつも伴って来ました。私たちの救い主イエス・キリストが、多くの人の贖いのために御自身の命を献げて奉仕してくださったのですから、福音の宣教のための殉教という形でその奉獻に与かる働き人がいつの時代にも教会にはいるのです。

1. マコ

イエスの弟子たちの中でペトロと共に特に重んじられたヤコブとヨハネが、エルサレムにおける受難に向かった旅も終わりにさしかかったイエスに申し出ました。

v.37 「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」

彼ら二人は、主イエスのメシアとしてのお働きに協力する熱心さにおいて、他のどの弟子たちにも負けないという自負を持っていたのでした。そして v.41 には他の10人の弟子たちが腹を立てたとあるように、この自負はすべての弟子たちに共通のものだったのです。そして、弟子たちのこの熱心が、やがて殉教という果実になって収穫されていく歴史が、初代教会の歴史となりました。

イエス・キリストの福音は、イエス・キリストの死と復活による“教会の贖いの福音”であって、信じて洗礼の秘跡を受けるすべての人々を神の国の相続者の群である教会に加え入れるものです。

この福音の宣教のために、ヤコブは最も早い時期の殉教者となりました(使 12:2 参照)。

2. ヘブ

歴史の中の教会は、いつもその時代との戦いの中でキリストの福音を宣べ伝えて来ました。しかし、そのような戦いがいつも良い戦いばかりであったという訳ではありません。特に私たちが今生きている現代日本における教会の戦いについて考えるためにも、私たちは健全な批判精神を養う必要があります。

それがキリスト教会が“本来戦うべき”、教会の“本来の宣教に関わる戦い”であるのかどうか……ということを改めて考えようとするなら、私たちはこの v.14 から最も基本的な判断の材料を得ることが出来ます。

v.14 「わたしたちには、もろもろの天を通過された偉大な大祭司、神の子イエスが与えられているので

すから、わたしたちの公に言い表している信仰をしっかり保とうではありませんか。」

先ず、教会の宣教の内容は「わたしたちの公に言い表している信仰」であります。私たちのミサでは通常説教の後に、“洗礼式の信仰宣言”が一同で唱えられます。これは非常に良く出来たものではありませんが、残念ながらあまりにも簡潔過ぎます。キリスト教会の信条としてよりふさわしいものとして、教会の歴史を貫いて大切にされて来た“ニケア・コンスタンチノーブル信条”が、ミサ式次第には掲載されているのに、全く唱えられることがないのは、とても惜しいことです。

多くの一般の信者たちが、教会の宣教の内容を“自己流”や“現代流”にではなくて、このような信条によって健全な形で把握し、健全な形で言い表すことが出来るように育てられることは、非常に大切なことでもあります。

次に教会の宣教の働きは、偉大な天の大祭司イエス・キリストの十字架の奉献に現代の教会の私たちが与かることであります。ですから、「罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます」と宣べ伝え、そのことによって人々がキリストの救いに与かるようになることが第一の目的です。主日ごとのミサに参加して、祭壇のキリストに与かる民となるために、悔い改めて福音を信じ、洗礼の秘跡を受ける人々が起こされることは、いつの時代にも宣教の第一の目的であることに変わりありません。

この宣教の使命のために、大祭司である祭壇のイエス・キリストは、ミサをささげる私たちに「時宜にかなった助け」(v.16)を与えてくださることを信じて、感謝しようではありませんか。

アーメン、ハレルヤ。

10月29日 年間第30主日

エレ 31:7~9 ヘブ 5:1~6 マコ 10:48~52

1. マコ

主イエスは間近に迫り来る受難の時を目指して進み行かれました。いよいよエルサレムに到着される記述の直前に、今朝の盲人バルテマイのいやしの物語りが置かれています。道端に座って物乞いをして生活していた彼が、ナザレのイエスだと聞いて叫びました。

v.47 「ダビデの子イエスよ、私を憐れんでください。」

“エレーソン メ”「私を憐れんでください！」という叫びが、この福音書の中で意味している重みを、私たちは学ばなければなりません。

主イエスは神の御子でありながら、受難の苦しみを父から与えられた救い主として、その召しを自ら進んで負うためにエルサレムに近づいて行かれました。“新しいイスラエルである教会”(ガラ6:16)の贖いのための十字架が目前に迫っていました。「ダビデの子イエス」とは、イエスを“イスラエルに約束された救い主”であると信じて呼んでいる呼称です。父なる神がその救済史を完成される御子の受難と復活の物語りの直前のところで、この盲人バルテマイは「エレーソン メ」(私を憐れんでください!)と叫んでいるのです。

2.

私たちのミサでも、その開祭の部分でキリエ(あわれみの賛歌)を歌います。私たちの教会では聖歌隊と会衆とが交互に同じ歌詞を歌うことによって、一同でキリエを三唱していますが、これは主に祈り求める“あわれみ”がキリストの祭壇を囲む神の民全体への“あわれみ”であることを表しています。

主日のミサに集まる会衆は、御子イエス・キリストの血によって贖われ、罪を赦されて神の国を相続する民とされたその救いの恵みを賛えて、このキリエを歌うのです。その救いは切り離された個人ではなくて、頭であるキリストにつながっており、キリストの体に造り上げられてゆく群(エフェ4:16)である教会への救いです。私たち一人一人が歌うキリエは、このような民全体への救いに“この私も加えていただいた”という信仰の歌であります。

3. エレ

救いはイエス・キリストと父なる神から来る……ということを私たちが信じる時、今朝の福音書のテキストの中の盲人バルテマイの叫びを正しく理解することが出来ます。

エルサレムが紀元前587年にネブカドネツアル王によって灰燼に帰し、南王国ユダが滅んで、生き残った民はバビロンに捕囚となった……、そのような歴史の悲惨のただ中で預言者エレミヤは、民の救いは

将来必ずイスラエルの神から来ることを語ったのでした。

そのように、今エルサレムでの主の受難とそれに続く主の復活の物語りの直前のところで、私たちは盲人バルテマイの「エレーソン メ」(私を憐れんでください!)を聞かされています。それは、御自身の血によって贖われるイエス・キリストによる教会の救いの中に、“この私も加えてください”という叫びであった……と、私たちは理解しましょう。

彼は「すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った」と、マルコ福音書の物語りはしめくられています。ミサでキリエを歌う私たち一同も、“罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じ”て、主の道を進んでいきましょう。 アーメン、ハレルヤ。